

第Ⅲ章 遺物の検討

靱形埴輪の検討

本書では一ヶ塚古墳周濠内から出土した靱形埴輪を報告した。ここではそれが靱形埴輪全体の変遷の中でどのように位置づけられるのか、ほかの資料も加えて検討してみたい。ただし、埴輪に形象された靱は単体のものと武人埴輪に付けられたものがあるが、ここであつかうのは単体で作られた靱形埴輪のみである。

1) 靱の形態と使用方法

まず、埴輪の祖形である靱について、現存する実物によって形態と使用方法を明らかにしておきたい。

靱とは弓を射離したときに弦がはね返るため、弓をもつ方の腕をその衝撃から保護するために手首の内側に装着する古代の武具である。実物は正倉院宝物に15口[奈良国立博物館1986]、伊勢神宮神宝に29口[橿原考古学研究所附属博物館1985]納められている。正倉院の靱(図109)は「二枚の薄い皮を巴型に縫い合わせ、内部に獣毛または藁を詰め、表面に黒漆を塗る。一端に牛皮で舌状の手を、他の端に洗革の紐を縫い付けてこれで手首に結んだ」[奈良国立博物館1992]もので、巴形の胴の大きさは長さ約12cm、最大幅約7cm、最大厚は約5cmである。伊勢神宮神宝の靱は「熊皮の表の毛を内側にし、中に藁を詰めて縫いこみ、外面を黒漆塗にして銀蒔絵の文様が両面に描いてある」[神宮徴古館農業館1993]もので、胴の大きさは長さ約12cm、最大幅約7cm、最大厚約6cmである。

正倉院の靱が奈良時代のものであることに異

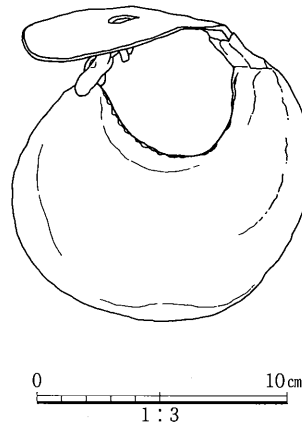


図109 正倉院宝物の靱
([奈良国立博物館1992] よりトレース)

論を挟む余地はない。また、伊勢神宮の鞆も式年遷宮とともに代々作り替えられてはいるものの、古い要素を伝えているといえよう。すると、奈良時代の鞆はクッションとなる胴と手首に結びつけるための舌と紐からなっていたことがわかる。胴は表皮に馬・牛・鹿・熊などの革を用い、2枚を袋状に縫い合わせて内部に獣毛や藁を詰めている。舌は胴の一端に縫い付けられた幅の広い革帯で、中央に紐を通すための孔が1つ開いている。紐は胴のもう一方の端に縫い付けられた細長い紐あるいは革である。全体の大きさについては左右の長さ12cmほどが標準的であったと考えられる。

2) 一ヶ塚古墳周濠出土の鞆形埴輪(図110-⑩)

形態の概要は本文で述べたが、再び詳細に観察して実物と比較したい。

まず、これは単体で作られた埴輪である。円筒形の台の最上部に鐙を貼付け、その上に鞆形をのせている。鞆形の胴は中空で底がない。つまり円筒形の台の上端から鞆形の胴を連続させて作っている。台は直径11.2cm、高さ14.2cmで、向い合う位置に直径5.0cmのスカシ孔がある。鐙は幅4.0cmで外周の直径は20.0cmである。これ自身はほぼ完形であるが、台が低く、鐙はそれに比べて大きく作られていることから、別の円筒形の台に載せて墳丘上に置かれていたとも考えられる。鞆形は胴と舌からなり、結ばれた状態を表現している。紐は表現されていない。胴は長さ24.4cm、最大幅12.0cm、厚さ13.0cmである。革の縫目を表す線刻などの文様はないが、本来紐が付く方の上端に2条の凹線を施している。舌は長さ20.0cm、幅22.0cm、厚さ1.0cmで、羽子板状に大きく作られている。上面には凹線による二重ないし三重の縁取りがあり、中央には凹線による二重円を施し、その中央に直径0.6cmの孔を2個開けている。この二重円の直下に胴の一端が繋がっている。胴と舌の間は胴の端を上下に扁平にした上で、その先に羽子板状の舌を海老の尾鱗のように接合している。

これを現存する鞆と比較すると、胴のふくらみや舌の大きさなど、全体の形は正倉院にあるような鞆を形象しているといえる。しかし、大きさは実物の2倍ほどであり、舌の形とその中央に開けられた孔が2個である点が異なっている。これらは古墳時代の鞆の形態を具体的に示す重要な特徴である。

3) 鞆形埴輪の類例と変遷(図110)

現在までに知られている単体の鞆形埴輪は約30例である。しかし、全体の形状が明らかなのは少ないため、形状や年代がある程度わかるものについて検討する。

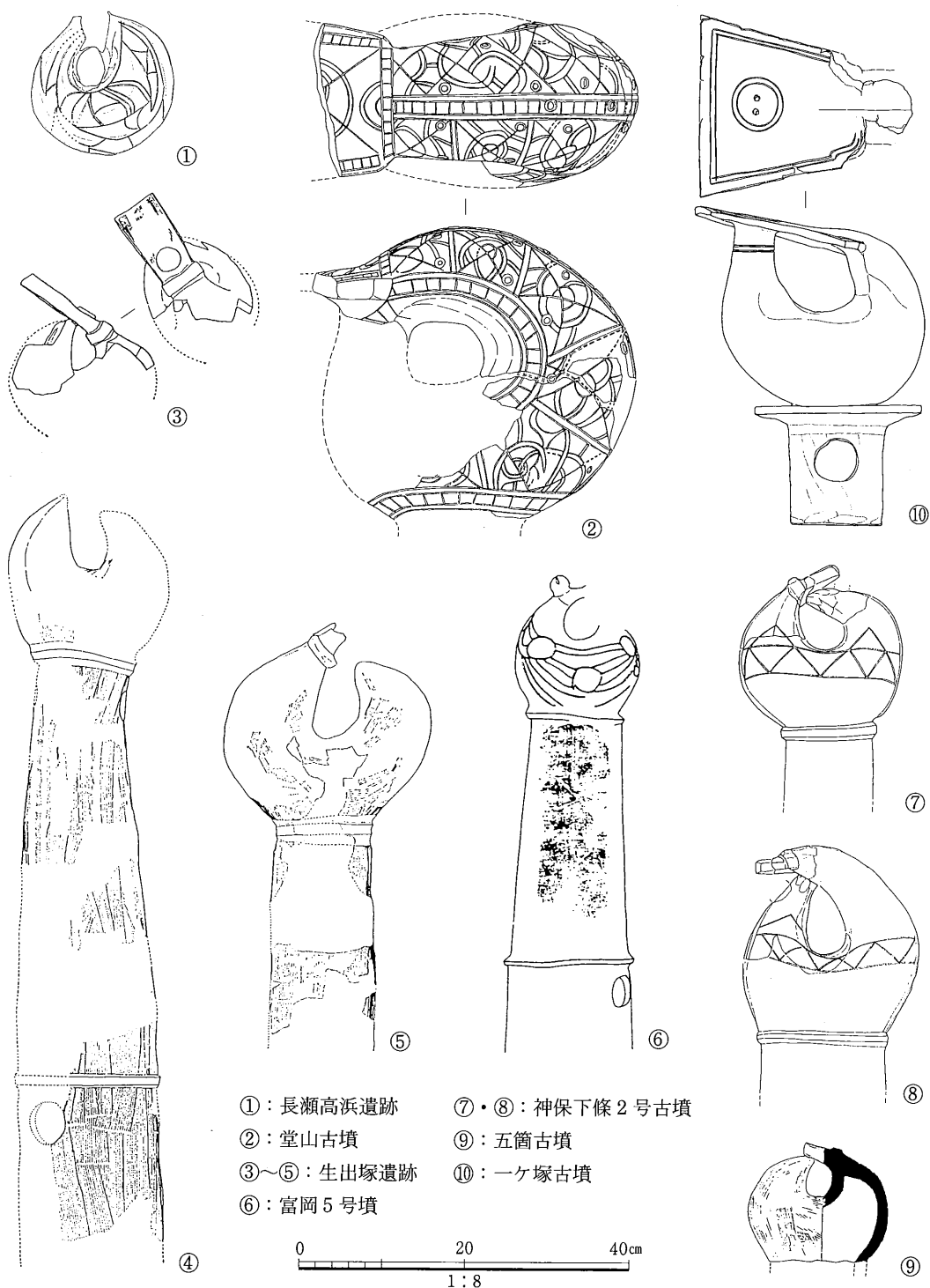


図110 各地出土の軛形埴輪

静岡県堂山古墳 [静岡県教育委員会1995]

5世紀中ごろに造られた全長約110mの前方後円墳である。靱形埴輪②は前方部墳頂の平坦面の後円部側から出土した。全体高は35.3cmで、台は欠損しているが円筒形で直径約15cmと推定できる。胴と舌にはすき間なく梯子状文と直弧文などが線刻によって施されている。舌は板状で、先端を欠損するが胴の先端と結ばれた状態を表現している。

鳥取県長瀬高浜遺跡 [鳥取県教育文化財団1982]

5世紀中ごろの埴輪樹立地から見つかったものである。靱形埴輪①は粘土紐を丸く輪にして作り、片面にのみ線刻による文様を施す。もう片面は平らで文様はない。台が付かないことから直接地面に置かれたか、別作りの台に置かれたと推定されている。舌は欠損しているが、胴の先端と結ばれていた状態を表現していたと推定できる。

京都府鳴谷東1号墳 [和田晴吾ほか1987]

5世紀に造られた直径約48mの円墳である。靱形埴輪⑪は墳頂部から出土した。全体高は約27cmで、円筒形の台が付く。台には低いタガが巡るが、靱形との境にタガはない。靱形は上部を粘土紐の輪積で作った球体を扁平に押しつぶして、上部の両面に直径約5cmの

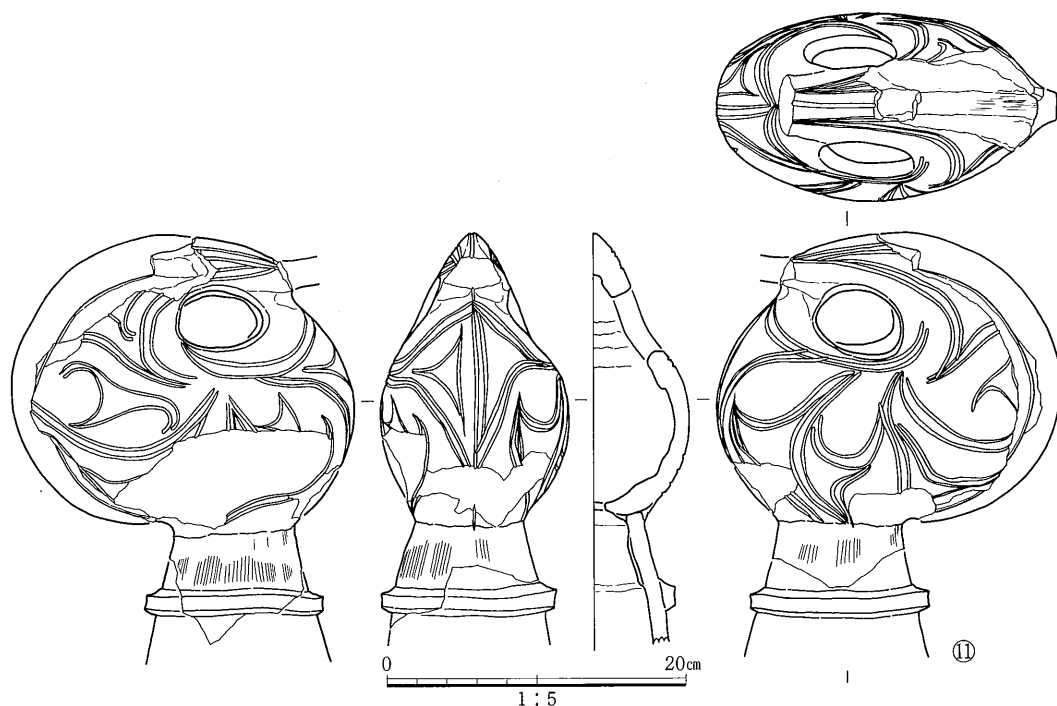


図111 鳴谷東1号墳出土の靱形埴輪

スカシ状の穴を開けて腕を通す部分を表現している。したがって穴から靱形の内部を見ることができる。靱形の底には直径約1.8cmの小穴が開いているが、これは焼成前に開けられたものである。靱形と台との関係は、粘土の継目などの観察から、別に靱形を作ってから台の上に載せて、粘土を充填しながら接合していることがわかる。ただし、線刻は接合後に施している。靱形は舌を欠損しているが、胴の先端と結ばれた状態を表現している。舌の反対側の背面には、幅1.5cmほどの割れ面でも剥離面でもない平滑な面が带状に認められる。また、それに沿って両側に割れ面があることから、革の綴じ合わせ部分は薄い板状の粘土を両側から合わせて、横断面が人字状になるように突出部を作って表現していたと考えられる。胴表面の線刻は基本的には二重線で施され、腕を通す部分をとりまくものと、そこから派生して円弧を描くもの、また三角形を描くものなどさまざまである。舌は根元しか残っておらず、幅は約4cm、厚さ約2cmである。黒斑がある。

群馬県恵下古墳 [梅沢重昭1981]

6世紀前半に造られた直径27mの円墳である。靱形埴輪は墳丘の周囲から出土した。全体高は約20cmで、低い円筒形の台が付いている。胴には線刻による三角形や円形の文様を施し、背面には突帯を貼付けて革の綴じ合わせを表現している。舌の先端は欠損しているが、胴の先端と結ばれた状態を表現している。

埼玉県生田塚遺跡埴輪窯 [鴻巣市市史編さん調査会1989]

6世紀初頭の埴輪窯から3個体が出土した。そのうちの④・⑤は全体高93～50cmで、高い円筒形の台が付く。台と靱形との境は明瞭でない。胴は無文で舌とは離れている。③は台を欠損するが舌がほぼ完存している。舌は板状で長く張出し、胴の先端と結ばれた状態を表現している。

群馬県富岡5号墳 [外山和夫1972]

6世紀中ごろに造られた直径約30mの円墳である。靱形埴輪⑥は墳頂部から出土した。全体高は58.0cmで、高い円筒形の台が付く。台と靱形との境は明瞭でない。胴には円形と三日月形の線刻を施し、舌との境に鈴を表現する。胴と舌が結ばれた状態を表現していたかどうかは不明である。

群馬県神保下條2号古墳 [群馬県埋蔵文化財調査事業団1992]

6世紀後半に造られた直径約10mの円墳である。靱形埴輪は墳頂部から同型のものが4個体出土した。⑦・⑧は全体高は約30cmで、円筒形の台の上に靱形を付けている。台と靱形との境は明瞭でない。胴には片面だけに鋸歯文を線刻し、背面には突帯を付けて革の綴

じ合わせを表現している。舌は欠損するが短い板状に復元されており、胴の先端と結ばれた状態を表現している。

栃木県五箇古墳 [佐野市文化財保護審議委員会1961]

6世紀後半に造られた直径約22mの円墳である。靱形埴輪⑨は墳丘から出土した。全体高は約10cmで、台は欠損しているが直径約9cmの円筒が付くと推定できる。胴・舌ともに文様はない。舌は短く表現され、胴の先端と結ばれた状態を表現している。

以上のほかにも4世紀末とされる三重県石山古墳の例[京都大学文学部博物館1993]があるが、全体の形状が明らかでなく、確実に靱形埴輪かどうかかわかっていない。これを最古の例としても、靱形埴輪はほかの形象埴輪と同様に4世紀末ごろに現れ、分布の中心は近畿地方であったといえる。また初期のものは[高橋克壽1992]がいうように胴と舌が閉じており、直弧文などの線刻を施すものが多い傾向にある。それが次第に簡略化され、6世紀中ごろ以降は無文になり、胴と舌が離れた形も作られるようである。また、分布範囲も関東地方に移り、群馬県や栃木県下で圧倒的に多く見られるようになるのである。

4) 一ヶ塚古墳例の位置づけ

一ヶ塚古墳は円筒埴輪の型式によって5世紀初頭に築造されたと考えられることから、出土した靱形埴輪は全国的に見てもごく初期のものといえる。これとほかの5世紀代の例を比較すると、胴の線刻は必ずしもすべての靱形埴輪に施されていたわけではないことがわかる。これに対して共通している点は、靱形と台との境がはっきりしていることであろう。6世紀以降のものは靱形と台との境が曖昧で不明瞭なものが多いが、5世紀代のものは制作方法からも外見的にも台の上に靱を載せているという形状が認められるのである。

靱を使うということは手首の保護だけでなく、弦打ちと同様に音を立てることも重要な目的であったといわれている。靱の神秘性を重視していたことは、数ある器財埴輪の中で、唯一靱だけが実物より大きく作られていることからわかるであろう。一ヶ塚古墳の靱形埴輪はその嚆矢である。

(松本)

本稿を執筆するに当たって立命館大学和田晴吾氏・加悦町古墳公園加悦町教育委員会専門員佐藤晃一氏から多大な御教示ならびに鳴谷東1号墳出土の靱形埴輪の実測について便宜をはかっていただいた。末筆ながら厚くお礼申しあげます。